落合恵美子編著
『徳川日本のライフコース—歴史人口学との対話—』

ミネルヴァ書房，2006年３月，448＋x＋5pp.

本書は速水融代表によって1995-1999年度に実施された「ユーラシア人口・家族史プロジェクト」を引き継ぐ落合恵美子代表によってまとめられた研究成果２冊のうちの第１冊目で，13人の著者による15章からなる大部な著作である．個人の人生に起こる様々な事象（イベント）を取り上げるライフコースを柱とした研究群からなる．出生（間引き・堕胎，捨子，貰子），子育て，結婚・離婚・再婚，労働移動，居住（高齢者の子供との同居），隠居，家の継承，祖先祭祀，改名，命名など多くの事象が取り上げられる．研究の対象は主に農民であるが，武士にも広げられている．

編者による序章は，各章についてその論点を紹介するとともに関連する家族史・歴史人口学の研究の到達点の中に位置づけており，家族をめぐる歴史人口学の最新の総説となっている．著書全体として歴史人口学の拡大と深化を感じさせるものがある．

副題に「歴史人口学との対話」とあるように，本書はこれらの問題を扱ってきた社会史，家族史の研究者が歴史人口学の問題意識，成果，手法と交流することによって生み出された研究成果であるといえる．（ちなみに13人の著者のうち日本人口学会会員は５人と，多くない．）そのことは，上記プロジェクトにおいて膨大な労力によって作成された宗門改帳のデータベースを利用する章が多いことに表れているだけではない．これらの多様な事象を取り扱う中に，人口学の基本的方法（個人１人当りが単位時間に事象を経験する率を意識した分析方法）が微視的なライフコース分析に取入れられていること，また，人口学の基本的認識方法である人口再生産という巨視的なシステム的視点が生かされていることである．

徳川日本において人口という社会の基盤を持続可能とするために，人口に関係する文化や制度の諸要素がどのような形でつながりあっているかというシステムを明らかにしたものといえる．その中核に家族が位置づけられる．編者は文化・制度的背景の違いがもたらす「人口学的効果」という興味ある用語を用いている．これは結婚や移動などの諸要素が人口に対してもたらす影響を指すようで，社会全体の人口システムを洞察するための手がかりとなるものといえよう．

各章の研究の重要な柱はそれぞれの事象についての地域性と歴史性を明らかにすることである．前者については，とくに東北日本２村と中央日本１村の100年を超える豊富な内容の宗門改帳データの比較を通じて，たとえば結婚についてそれぞれ早婚と晩婚を軸とした異なるシステムの存在が明らかにされている．

後者については，とくに家の確立への歴史的変化がいくつかの章で共通して抽出される．婚姻の流動性（結婚から離婚までの期間）の限定化，姉家督の発生，祖先祭祀が個人単位に継承される「半檀家」慣行から一家一寺制が成立することなどの知見である．家の確立への変化過程が人口システムのいくつかの側面の変化として具体的に明らかにされているともいえる．また，間引き・堕胎から捨子・貰い子への変化の背景に生命観の変容があり，明治政府の堕胎禁止，棄児の保護につながるものという指摘は興味深い．

徳川日本の生産の単位としての村は現代日本の会社にあたる．藩と村に対応する現代の国家と会社が現代人口システムに関わっていることは，戦後企業における新生活運動（家族計画普及運動）を振り返るまでもなく，近年のいわゆる少子化過程を通じて自明となっている．昨今，企業・事業所が次世代育成支援行動計画の主体として，より自覚的に人口過程に参与していく段階に至り，緩やかに変容（崩壊？）していく人口システムを扱う現代人口学が，徳川日本の歴史人口学から汲み取るべきことは少なくないはずである．

（廣嶋清志／島根大学）